

COSMOS集



一直線に並び八羽の白鳥が冬の気配を今日連れてきた

むらさきの雫

吉弘 藤枝 琦玉

秋づける光の中に公園の花水木の実日ごと色付く

葉のかげにかくれてゐたる柚の実が色付き初めて姿あらはす
なつかしき「今日でお別れ」聞きながら再び会へぬかの人思ふ
卵も油も値上りをするこの秋の秋刀魚大漁のニュースを喜ぶ
むらさきの雫をしきりに零しをり秋海棠に雨降り続き

野辺山の空

高木 裕子* 神奈川

秋風に日傘たたためばすじ雲がくつきり浮かぶ野辺山の空

野辺山の丘わたりゆく風の声ささやくように「もう秋ですよ」
夕立の止みたる空に虹がたち見知らぬ人と笑みを交わせり
代変わり相続税の為に売る野菜畑に秋雨が降る
畑には「住宅用地」の木札立ち今年かぎりのかぼちゃ転がる

金色の蕊

奥 浩昭 東京

バラ祭り始まるけふの明け方をばらんばらんと秋の雨降る

青桐の大きな葉は風に揺れ地下鉄四ツ谷駅照らす月
花びらのやうなる白き苞をもつ白鷺蚊帳吊すずしげに立つ
野辺山に藤村が見し松虫草金色の蕊ひかるその花
書き込みの多き頁をめくり読むトマス・ハーデー『無名のジュード』

大野 英子選

「あすなる集」特選

かそけき音に

久保 雅子 北海道

秋仕舞「負けられません勝つまでは」己れ励まし傭仕事する
コスモスの末枯れを抜けばふれあひて種子落つるなりかそけき音に
札幌の娘に持たさんと揃へ置く農家の新米秋の根菜
葡萄の木六本あれば取るにさへ手間のかかりて日暮の早し
玄関内に葡萄七箱つめて置く秋の終りの香りは満ちて

リセットボタン

成田 裕子* 青森

ひとつかみ量り売りにてしじみ買う今夜の二人の夕餉のために
ノンアルの水色の缶そばにいてくれるわたしの眠れぬ夜に
体中のリセットボタン一つずつ押ししてもらいに整体に行く
フリースのタートルネックを二枚買う 北海道に初雪予報

藤野 早苗選

汗の部分 清水美里*東京

地下鉄のホームの椅子で泣いているひとの背中に触れたい しない
考えているときに唇とがる癖 解のないことはかり尋ねる
吹きわたる風に揺らがぬ書割の木の葉私はじっとしている
シャンブーに汗のにおいの混ざる午後汗の部分わたくしである
下半身ばかりが通る待ち合いの椅子に私はうつむいていて

タワン僧院 藤田邦彦*東京

セラ峠雪舞うなかを下りきて春も盛りのシャクナゲの花
ヒマラヤの三千メートル地帯にもモスグリーン**の**兵舎がつづく
ヒマラヤの朱きシャクナゲ咲く峠中印国境兵舎がつづく
ヒマラヤも過放牧らし牛、山羊は舐めるがごとく草を食みおり
光残る白き峰々 山腹のタワン僧院はや影のなか

仏師 佐藤多佳子 新潟

瀬音巻き冴ゆる風ふく慈光寺に杉の並木はしんしんと立つ
参道にさし込むひかり梢ふかく癒し求むるわれをいざなふ
参道にすつくと並び見守れる杉の姿は仁王のごとし
そそり立つ杉一本のひと枝が竜神となり天へと昇る
的確に言葉を削り彫り出だす歌人になりたし仏師のごとき

令和六年夏 栗三誌 野*富山

わたくしに無いのを思い出すだろう令和六年夏の暑さを
雑誌には詩歌特集載りていて検査結果の裏に写しぬ
公園の木々紅葉して気がつけば季節が齡かけ抜けてゆく
退院がきまり誰にも言わずおく私の涙の本当のわけ
ときめいた事はないかと聞いてみる私以外のだれかにむかし
セーター植物 清水由美子*長野

六歳がこっそり蒔いたアサガオが次々と咲く夏の置土産
「ヒバクシャ」が世界に認知される時ついに来たりぬ不断の歩みで
ヒマラヤの寒さを生きたる草花に綿毛の著しセーター植物
エグモント弾き終えた弓を天に刺せ全体重で終音鳴らす
演奏を終えた安堵と入りまじる小さき悔いが次回への糧
水上 美季選

むかしのぼく 田原五郎*京都

ふたたびに能登半島が被災するヨブにはなれぬぼくらは誰も
ありのまま過ごした月日語ってる手の甲見てる皺見つめてる
電池切れ時の止まった腕時計止まらず歩く夕暮れの街
ほの暗いホテルの廊下を過ぎゆけばむかしのぼくと同窓の友
まるでもう峠の茶屋にいるみたいペンチにすわり秋空見てる

満月がのる 大池 アザミ*兵庫

リビングの時計の音が大きくて今はここにはわたししがひとり
手が小さい人は大きな仕事する占い信じてこの年となる
数冊の古本安く手に入れて数日間の過ごし方決まる

手のひらに満月がのる時刻すぎゆつくり浮いて離れる満月
新しい靴にあいさつするように自分の足をすべり込ませた

絵 手 紙 友 田 昌 子*奈良

御神灯ともし待つ間の夕まぐれ太鼓台来るソレ行けヤンヤ
甘樫丘あまぎのおかにころがるどんぐりを夜ごと獣が来て食べるらし
青ぶどうほろほろかおる秋なれば絵手紙書こう森のきつねに
時かけて大きく育ちゆくねぎの土壌のかおり恵みのひかり
乾ききるわれの心をうるおして秋雨過ぎゆく明日香いかにすち雷

ベビー布団 桜庭 さわね 鳥取

情熱を一気に開放するごとく彼岸花燃ゆ緑の畔に
十五羽のガラスが落穂ついでみて豊作なりたる田のさうざうし
赤子抱くやうに五キロの米を抱く米不足のなかやつと出合へた
孫ねむるベビー布団は母の作この子に会はぬままに逝きたり
花柄のブラウス、ピンクのスニーカーで自転車をこぐシニアに見入る

風 の 手 樺 か 乃 広島

呉沿線つね変はらざるこの海にまなこで告ぐる妹の死を

ゆつたりと海面なぞる風の手が朝日にみゆるきらきらとして
海近く育ちしわれに潮の香は亡父の声のやうに懐かし
十本のピンクの薔薇がみる度になこつと笑ふいつもの机上
すつぱりと袋かぶせて持ち帰る彼岸花これは知り人ならむ
福士 りか選

夫の背中 松岡綾子 香川

深くふかく思索に沈む部屋の外冷たい月が微笑んでゐる
白鷺のきよき姿に近寄ればそくはぬ声で「ぐえ」と飛び立つ
虫の音が窓より入りて寝室はf分の1のゆらぎに満ちる
「行つてくる」と祭り絆纏ひるがへす少し瘦せたか夫の背中は
傍らで寝そべる犬の巻き毛などで返す言葉を考へてゐる

あ の と 尾花照子*福岡

地下鉄の車窓にうつるぼくたちに液化した灯はながれつづける
自販機の裏の子ねこはゆうぐれの足音あのこのたびにかほそく鳴きぬ
ふらここをおりて少年駆けだしぬザラメ砂糖の陽を受けながら
ガードレールのオロナミンCその底へ今日の夕陽は重なりゆけり
隣室の物干し竿にステイッチは吊るされておりすこしへこみて

丁度よい 山崎常子 長崎

丁度よいわたしの歩いた人生はプラス・マイナス良くも悪くも
雷も台風さへも気にならず怖くなかつた子ども頃の頃は

お手玉が苦手でいつも負けてゐた今も変はらぬ不器用な吾
母が子を殺めるニュース今日もありこの国の闇深きを思ふ
真実と事実のちがひまだ今も分からぬままに今日も詠みをし

アウトレイジの目 小森田 より子*熊 本

猛暑日の連続記録更新の記事の下にはおせちの広告
大切な花にアオムシ這いおればアウトレイジの目をして向かう
ウォーリーを探せのように夫捜す五十年前の集合写真に
思いつく歌書き留むるチラシ紙米欠品を詫びているなり



秋の日も耳なし芳一も思もいながら耳までしつかり塗る日焼け止め

力 湧 く 田 中 司 郎 鹿見島

喜びと悲しみを知る鉄の鍋銘酒の杯が伴走つとむ
真夏日に境内にある楠の木をひしといだけば力湧き来る
長寿祭の宝さがしのブースにて紙製の銀のメダルを受けとる
臥す妻にやつと作りし目玉焼鍋から移せば宝石のごとし
日銀を白銀と読みしに気がつきて眼鏡拭き拭き朝刊を読む

小島 なお選 「その二集」特選

秋は来ます くどう れいん*岩 手

窓辺から秋は来ますと言ひ出してビデオ会議に猫と出るひと
塔のように口紅はいくつもあるがさてどの色に燃やすとしよう
失望の奥へ行くとさ滝の音聞こえて、ならないの、会話に
無視がいちばん いちばんなわけなのにねベランダに蜉蝣のぬけがら
紙縫りのような電話の声のそれ以上書けなくなったミトンの話

タイングレース 谷 川 恵 崎 玉

八つ割りの新高梨を剥くゆふべしゆるり剥かるる皮のおほきさ
みしみしと痛むこと増え処分するタイングレースのちさき道具を
古猫はわが家に居らず古猫のやうに息する古ふるヴァイオリン
ディンクスを希望してゐたそのひとの勤めてくれたタージリンの香
わたくしの四パーセントを過あしたるだけのあの街 また夢にみる

中空の薔薇 谷 真 樹*神奈川

みながみな真白ではなくよく見ればたださびしさに底濁る雲

ありがとうはさよならよりも半歩だけいつもせつない川沿いの道
あなたへの水門はみな閉じられた流れがかわる予感をのこし
雲間よりときおりひかる雷は色決めかねし中空の薔薇
傘のうち雨も本音もわからぬが祈りささぐることならできる

ご唱和ください

新 美 亜希子* 神奈川

母の日のカーネーションとまでしこは似ている危険 離しておこう
順番に人は退場していかない 百番 一番 二十五番
チェロを弾けば亀は手足をばたつかせごっこごっこつりご唱和ください
リカオンの子育て中の映像をねぎの青いところを刻んで眺める
全ての女性の中にお母さんが灯る 夕方の眼が疲れてくる頃

点

松 下 誠 一* 東京

水際にひとり丸まる朝方を遠くに三基あるガスタンク
卓上の瓶に挿されるケイトウは母と住んでるから見れた花
瓶のふちに接する点を持ちながらさらに傾く茎というもの
ニンニクの芽とレバーが熱に絡まるを客がひとりの中華屋に聴く
灰皿に氷はじつと溶けてゆく煙のなかの秋の円卓

鈴木 竹志選

お け さ 柿

小笠原 麻 美* 新潟

問い直す今大切なことは何か 迷いの渦に縛られてわれ
かみ合わぬ言葉飛び交う会議室一人微笑む地蔵でおりぬ

熱意見て冷笑返す人の背に「保身」と書かれシタスキが見える
昔から冷たい人が多いなどと言いつきにすまい今この町で
〈おけさ柿〉薄く切り分けヨーグルトかけて食みおり贅沢な晩

大 文 字 草

佐 野 庸 子* 新潟

尾根道に出れば青空広がりて姉は手を上げ踊りだしたり
手にすくい飲む湧き水の冷たさよ大文字草咲く登山道
夏休み終わる明日は愛知へと帰る女孫におこわを作る
灰色の空を隠して立つビルを見上げておりぬ東京駅で
人混みは未だ怖くてマスクする東京駅の乗り換えホーム

テネシーワルツ

権 田 陽 子 静岡

ゆふぐれがた社交ダンス教室のフロアに流れしテネシーワルツ
初めてのダンスパーティー会場はミラーボールの煌めきの海
わが背せなに添はす右手に込められし力にたぢろぐラストのワルツ
根性無しのわれが登りし谷川岳 小六の夏父と二人で
豆カレーの豆の名問へばネパール人の若き店員「テッチャイマメ」とふ

マシユマロの歌

法 月 理 栄* 静岡

アマチュアの天文学者のいた街よ葉屋の上の銀色ドーム
一冊の本のシアワセ匂いたつ幾多の人の心のニオイ
電柱の元に咲きたる白百合の誰がくくりしや茎を抱く紐
月一度介護ベッドの母に会う一喜一憂くりかえしつつ
マシユマロの歌詠みし人の在りし日の国語の授業受けてみたきも

最後の祭 川田 ゆかる*大阪

不機嫌な上司によればサスペンス劇場となるオフィスの一角
食事終え葉をとりだす人たちが窓辺に並ぶ平日のカフェ
ロボットのような口調で話す君の頭の部品を交換
はっぴ着て声囁らすまで叫んでる閉店セールは最後の祭
絹糸でちぎれた小指を縫いなおす繰り返される約束のため

風間 博夫選

きょうだいげんか 山 添 聖 子*奈良 良

夏風邪をひいた子どもの熱き手に触れて覚醒する午前二時
ご機嫌はひなたのソフトクリームの速さで崩れるきょうだいげんか
カルピスの薄まつていくより早く仲直りするきょうだいげんか
パフェひとつ食べ終えたときにだけ摂れる栄養がある週末のカフェ
十月の風は金木犀の香と運動会の音運びくる

立派な子育て 吉 方 明 美*広島 島

招待状受けとり初めて参加する敬老会と呼ぶ合コンに
天国へ引越したのタケちゃんは思い出少し私に預けて
あり余る時間手にして暮らす日々今なら立派な子育てできそ
う
年賀状出さなくなつて三年目十一月が身軽になりぬ

「まだいたの」ペランダの隅で野宿する青ガエル今日で五日目となる

農夫の鎌 岡崎 清和 香川

中秋の名月観ませう二人して今宵ゆつくり時は流れる
朝八時テレビに現る大谷は超人ですかポンポンと打つ
背伸びして稲から顔出す稗や草 刈らねばならぬ農夫の鎌は
恋愛もマッチングアプリでする時代どこに消えたか 月下老人
老体に鞭打つボクに容赦なく刈られても畔に草は繁りぬ

エメラルド婚 原 万 紀 長崎

青しそをつみし匂ひの残りある指にて通夜のネックレスする
穏やかに終る命を見せくれぬ義兄は九十七年生きて
良き事も躓く事も多々ありて生きる事楽しわれ喜寿となり
残生をいかに過さむ子は遠く病む夫と祝ぐエメラルド婚
微笑める遺影の姑に声をかけ針箱あけて木綿糸つかふ

案 山 子 小 田 美恵子*宮崎

「この秋は短い秋になるでしょう」予報士は言い真夏日続く
庭先に迷いこみたる猪の子はじつと見ている驚く吾を
稲刈りと脱穀同時に作業するコンバイン殿は働き者よ
機械化と担い手不足すすみゆく見ることのなき案山子、架け稲
三日ほど胸につかえる事のあり切れる間のなき夜半の雨音